

# 国民文学のストラテジー —プロレタリア文学運動批判の理路と隘路—

内藤 由直

本研究は、日中戦争下の一九三七年および戦後占領期の一九五二年に生じた国民文学論争とその同時代文学作品を、プロレタリア文学運動批判の論理、特に「政治と文学」の関係性に対する係争的論理として再読することによって、「国民文学」という言葉に内包される諸概念と問題点を析出し、国民文学とは何であったのかという問いに答えるものである。

昨今、国民文学論は、戦争（太平洋戦争・冷戦）に触発されて発生した時局便乗的な議論として把握され、ナショナリズム・ナショナリティの再生産に加担する文学論として機能した一面が否定的に評価されてきた。しかし、本研究では、先行する前時代の文学論に対する批判的言明としての側面に注目することで、国民文学論が単なる国家主義的な言説ではなく、同時代の文学状況を超克しようとする係争的な議論であったことを指摘する。同時に、国民文学論および具体的作品の中に看取される前時代の反復を析出することで、国民文学論もまた時代の限界に枠付けられた議論であったことを指摘し、解決に及ばなかった課題が次代の議論（〈近代の超克〉論）を惹起する要因となったことを明らかにする。

具体的には戦中戦後の国民文学論および国民文学と考えられた諸作品（林房雄「青年」、佐多稲子「みどりの並木道」）に織り込まれた近代主義批判・組織論批判の側面に注目し、「国民文学」が日本のプロレタリア文学運動に孕まれた問題点を批判的に摂取し揚棄しようとした議論であったことを指摘する。そして、それらがプロレタリア文学運動批判の論理として理論的必然性を持って要請された議論であったことを明らかにする。しかし、同時に、国民文学論がプロレタリア文学運動の軛となった近代主義（対西洋意識および近代的自我の問題）と組織的硬直化（政治の優位性論および場の編成による暴力の問題）を、概念の擬似的反復によって再生産し、それを内面化することで過去の問題点を未解決のまま次代へと存続させていった様相をも開示する。

これらの作業により、プロレタリア文学運動に後続する革命の論理であり、かつ革命を去勢する論理でもあるという両義性をもった議論として「国民文学」を位置付けることが本研究の目的である。